

# 平成 28 年度第 5 回観察会 記録

日 時	平成 28 年 9 月 12 日 (月) ～ 15 日 (木)
観察地	長崎県平戸島
講 師	コーディネーター：田中 克先生、現地講師：小関 哲 先生、小関彰博氏、今井弥彦氏
テーマ	『21 世紀の人間と自然を考える』－悠久の営みと若き継承者たちの営み
備 考	参加者数 22 名、田中 克先生、スタッフ 2 名 (藤田、飯田) 計 25 名。 記録 飯田正恒

## 観察会のねらい

平戸島は、1976 年に平戸大橋が建設されるまで、九州本土とはフェリーでのみつながる離島の存在でした。長崎市からは遠く離れ、しかも島は北東－南西方向に長く、北端の平戸市中心街から南端の志々伎地区までは車で 1 時間以上もかかる交通の便から、隠れキリシタンの足跡が各地に残り、今なお都会にはない田舎暮らしの良さが残る島でもあります。

この観察会のお世話をいただく小関 哲さん (写真右下) は平戸島で生まれ育ち、子供の頃から自然とともに暮らす原体験、さらに大学卒業後の英国留学などの国際経験などを基盤に、人の暮らしや幸せの原点を理屈抜きに体験してもらえ、平戸島などの離島体験を通じて、生きる基本としての人と人のつながりの大切さを広める活動を進めておられます。平戸島での自然観察会を企画した背景は、2011 年 8 月に熊本市で開催されたシンポジウムで小関さんに出会ったことによります。私が 30 歳代を通じて参加した、マダイの初期生態、沿岸性魚類の生態を総合的に解明するわが国を代表するモデル的研究が展開されたのが平戸島でした。その調査において全面的にお世話になった漁師さん一家が、小関さんのプロジェクトにも深く関わっておられることを知ったことも企画立案の動機となりました。私が平戸島でのマダイ調査に没頭した時期には、まだお生まれになっていなかった小関さんと「時」を結んでくれた観察会と言えます。(田中 克)



## 1 日目：10 月 12 日 (月) 雨のち曇り

1. 新大阪駅 8 時 04 分発さくら 547 号で博多へ向かう。博多で田中先生と合流し、チャーターバスで一路平戸へ。その途中豪雨に見舞われ、車内に雨漏り発生。
2. 午後 1 時半に平戸瀬戸市場に到着し小関氏と合流。昼食 (海鮮どんぶり + タイあら汁・・あら汁がまことにおいしかった) 後、小関氏による 4 日間の行動予定のあらましの説明あり。
3. バスで根獅子の浜に移動。小関さんが尊敬してやまない今井弥彦氏の塩炊き工房を訪問し、今井さんの塩づくり哲学を聞き、工房を見学した。この頃には雨が上がり、よい状況になった。

### (1) 今井弥彦氏の塩づくりにかける想い

出身は長野県松本市。林業を志す一方、学校では教えない地方の言葉や食べ物など、特に田舎に色濃く残っているものに関心があり、三重、高知、天草などを経てここに来た。塩づくりの技術を天草で得て、根獅子で塩づくりを始めた。「私が始めて作った塩を食べてくれた人が“懐かしさ!”と言った。この人は塩の本当の味を知っている人で、長い専売の時代、精製塩しかなかった時代を経て、ほんとの塩の味に出会った人の喜びの聲が忘れられない。この海を守り本物の塩をつくっていく」と。

### (2) 塩づくりで大切なこと

製法もあるが最も大事なことは、塩が作れる海域を保存することで、その



一つに山からミネラルを多く含む水が海に注がれる環境が維持されていることが大切とのこと。健康な森は海の魚だけでなく、塩づくりにも関係し、まさに森里海連環の世界であることを知った。  
今井さんから説明のあった塩の製造法を別紙に記載しているので是非お読みください。  
(右はお土産にいただいた今井さんのつくった塩)



4. 宿舎（平戸海上ホテル）に到着 17：30 ごろ 夕食 19：00～ 就寝

### 9月13日（火）曇り

#### 1. 崎方公園にて：案内説明 小関 哲 先生

崎方公園は平戸港と市街地を一望する高台にある公園で平戸ツツジの名所でもある。園内の一角にキリスト教信者のお墓や、平戸の海外通商に貢献した三浦按針、フランシスコ・ザビエルの記念碑などがあり、市街地までを散策しながら、平戸地方におけるカクレキリシタンのこと、三浦按針のこと、平戸で没した英国人の碑のことなどの説明があり、平戸の歴史の一端を知ることができた。ここから、普段は博多で働く堀 文治さん（右写真）が同行。



##### (1) カクレキリシタンのこと

現在日本のキリスト教信者数は人口の約1％であるが、長崎県は県人口の約12％が信者という。

戦国時代、ヨーロッパからキリスト教が日本に伝わり、平戸島など長崎で布教活動が盛んに行なわれ、多くの信者ができた歴史上の経緯による。

キリシタン弾圧を受けても棄教せず、秘かに信仰を続けた人びとがこの地方に多くいて、明治になるまでキリスト教信者であることを隠し通した人びとは、隠れキリシタンと呼ばれたが、禁教令廃止後、晴れてキリスト教徒に復帰した人ばかりではなく、棄教してしまった人もある。それは何故か？ 平戸島、五島列島などの彼らの信仰と苦悩の歴史をキリスト教墓地の前で、高山右近や茨木・千提寺の隠れキリシタンと重ねながら聞いた。

現在の平戸のクリスチャンのお墓は、日本式の石塔に十字架を付加した様式であるのが珍しかった。

##### (2) 三浦按針（ウィリアム・アダムス）の墓

1600年に平戸に漂着したオランダ船リーデフ号のイギリス人航海士ウィリアム・アダムスを徳川家康は気に入り、外交顧問に採用して三浦の領地を与え、名を三浦按針とした。彼は江戸、三浦、そして貿易の重要拠点だった平戸を行き来し、晩年は平戸に住み、ここで亡くなった、平戸の恩人。

私が子供だったころ、父親とその仲間が休日になるとお墓を掃除するから手伝えと、よく引っ張りだされた。昔に平戸を築いてくれた人のお墓など粗末にせず、按針の命日を按針忌としてお祀りすることを始めたところ、イギリス大使やオランダ大使も参加するようになり、数百人が集まるイベントになった。

一方、無名ながら平戸で亡くなった船乗り、大工さん達の名前を刻んだ碑が三浦按針の墓の横に造られ、碑の銘文をアメリカから来た子供達に読んでもらっている。400年前に平戸に来て亡くなった人たちに思いを馳せようとしている平戸の普通の市民の子であることに誇りを感じている。

##### (3) 平戸の自然

照葉樹林が多く残されており、三浦按針の墓の近くでフクロウの仲間の子育てがみられるとのこと。

##### (4) フランシスコ・ザビエル記念碑

日本渡来 400 年を記念した碑を置いた「フランシスコ・ザビエル記念碑広場」があった。

## (5) 平戸は銀の取引所であった

当時の世界経済は銀本位制であった。日本は世界の 1 / 3 を産出量し、その 9 割は平戸で取引された。オーバーに言えば現在のドバイのような存在だったとのこと。

## (6) アゴの話あれこれ

今の時期、平戸湾では満潮の時アゴが飛ぶので、網をもって獲ることができる。アゴは、産卵場所は種子島当りで、対馬海流にのって北上し、平戸までくると体長 15 c m 程度に、鳥取沖までくると 3 0 c m くらいになる。名の由来は、乾すと硬くなり、焼いて食べるとアゴが強くなるという説、もう一つはアゴにヒゲがあるからという説がある。

## (7) 自由行動

午後 2 時に平戸オランダ商館に集合することにして、それまで自由行動。

## 2. 「平戸の歴史と文化」講演 講師 小関 彰博氏（小関 哲先生の父君、平戸オランダ商館会議室にて）

作詞家藤浦 洸は平戸の出身ということから始まった 1 時間の講演の内容は多岐に渡った。現役時代の仕事、平戸に住むことにした理由、「平戸の空」の挿絵を描いたエリック氏のこと、自然と人間を知ることに関心があること、平戸オランダ商館の再建に尽力したこと、またこの建物は単なる空間ではなくその中で演じられるドラマと密接な関係を持つものであり、造って良かったとの思いを強くしていること、徳川家康がのイギリスにあてた朱印状を外国に行って探し当てたこと（商館に展示）、地政学に関心があり、この視点から平戸をみると面白いことが多々ある。例えば平戸は日本の最西端にあり、朝鮮半島が近く、黒潮の流れに乗って中国との交易が盛んであったこと、遣唐使船も平戸を経由して出発したこと、源平の時代からこのあたりを支配してきた松浦氏は貿易によって経済を支えていたが、中央政府に対しては適度に日和見しながら明治まで持ちこたえて来たこと、魏志倭人伝に弥生時代後期の倭人が紹介されているが、平戸島はその当時の生活習慣を色濃く残していることなど、最後は、平戸は一周遅れのトップランナーになることで存在感を示すとのことであった。



## 3. 「鯛の鼻自然公園」、「川内峠」

バスにて「鯛の鼻自然公園」に行く。運が良ければハチクマやアサギマダラの渡りが見えるという。

当日は残念ながら目撃できなかったが二箇所とも西海国立公園の雄大な景観が存分に楽しめた。

特に川内峠は、道路脇から丘の上に登ると 3 6 0 度の展望が開け、生月島、西彼杵半島、五島列島まで眺望できる大パノラマが素晴らしかった。。

## 4. 古民家レストランで多国籍ディナーと懇親会

フィリピンから平戸に来て、古民家（江戸時代の廻船問屋）にてレストランを営んでいるクリスティーナさん（右写真）の心づくしのおいしいお料理をいただきながら、懇親会を行なった。最初にクリスティーナさんにお料理を説明していただき乾杯。しばらくお料理に舌鼓をうち、その後田中先生、小関彰博さん、堀さんに続き、全員自己紹介などのショートスピーチとジャンケンゲームで、おいおい盛りあがったディナーとなった。



平戸海上ホテルへ戻り、入浴・就寝。



9月14日（水）曇り

朝起床して海をみると、かなり波が立ち本日漁船が出港できるかどうか心配したが、幸い雨は降らず、バスで目的地の志々伎に向け出発した。約1時間で到着、荷物を公民館に預け、福田酒造の酒蔵見学に向かう。

### 1. 福田酒造見学

福田酒造は創業元禄元年（1688）で平戸藩御用達の酒造会社。  
「福鶴」ブランドの日本酒の他、焼酎、甘酒など多種を生産。資料館と工場見学後、試飲を楽しんだ。



見学後、公民館に戻り昼食をいただいた。昼食は志々伎の方々手作りのお弁当でボリュームたっぷり、おいしかった。

### 2. 漁師体験

2班に分かれ、1班は楠富船長の漁船に、2班は柴山船長の観光船に乗船し、一路定置網を仕掛けた宮の浦をめざした。

朝、高かった波も収まり船は快調に目的地へ向かい快走。

2班の船が目的の場所は着く頃、1班組の漁船は定置網を引き上げ中で、網の中に多くの魚が見えた。



2班組は、1班組の皆さんがタモで魚をすくい上げ大喜びするのを見学。漁港に戻る途中、飛び魚の飛翔をみるのができたのがよかった。また数多くある島はオオミズナギドリの繁殖地になっている

島もあるとのこと。柱状節理のダイナミックな岩の景観も素晴らしかった。船酔いする人もなく、1時間半のクルーズを終えて港へ着いた。

### 3. 対面式

9月14日に民泊する、志々伎の漁師さんとの対面式を公民館で行なった。一行を代表して飯田がお世話になることへのお願いをのべ、また田中先生が若いころ志々伎で研究生活をしていたことやお世話になったことなど、この企画をした経緯を説明。これに対し、とりまとめ役の小崎 孝さまに歓迎のご挨拶をいただき、対面式終了。グループごとに挨拶を交わし、それぞれの家に向かった。



### 4. 民泊

それぞれのお家で心のこもったおいしいお料理をいただき、またお料理法を教わって皆で調理したり、後片付けなども皆でやり、夜が更けるのも忘れ遅くまで話しこむなど、とても楽しく忘れられない一夜になった。

宿泊先	宿 泊 者（敬称略）
柴山伸幸様	青木賀代、池上千代江、奥野初美、吉田愛子
楠富喜美子様	安達美恵子、有住正子、笹井早苗、豊中啓尹子
吉村順子様	石川タヅ子、板倉年江、佐々木明子、堀井良子
西村光洋様	大谷志加子、田中和江、澤村泰子、藤田益栄
宮田洋子様	筒井いくよ、堂下登美子、星田京子、御薬袋宣子
栗山千穂子様	田中克、大橋繁喜、船本浩路、晴 久夫、飯田正恒

9月15日(木) 晴れ

## 1. 志々伎とお別れ

志々伎でお世話になった方々にお見送りいただいた。  
グループから1名づつ謝辞をのべ、それに対してホストのお母様方からも答礼があり、最後にとりまとめ役小崎孝様の挨拶がありました。記念写真を写したり話が続きたり、別れを惜しむ光景があちこちにあった。志々伎の皆さん、ほんとうにありがとうございました。



## 2. 田平天主堂拝観：案内係りの瀬戸博子さん（右下写真）に案内していただいた。

## (1) 教会の歴史

この教会は、明治の初めごろ、九十九島の黒島などから移住して来た元潜伏キリシタンがカトリックに復帰して造り上げた。その後、人口が増えると、神父が田平に土地を購入して数家族が移り、次第に移住者が増え、本格的な教会の建築を計画した。信者の積立金、県内各地での募金、篤志家の寄付などを資金とし、信者の献身的な労働奉仕により1918年に完成。設計施工は教会建築を得意とする鉄川与助で、レンガ造教会の最高峰と言われる。レンガの繋ぎには、ミナの貝殻を焼いた石灰が使われ、それを作った竈跡が今も残っている。長いキリシタン弾圧の苦難の時代をのりこえた信者の人びとが浄財を持ち寄り、奉仕の精神で作った教会は、まさに心の安らぎをもとめる人びとにふさわしいたたずまいであった。



(2) 教会は、平戸瀬戸を見下ろす高台にあり、歴史的環境がよく保存されており、国の重要文化財。

(3) 戦時中には天主堂の半分が兵舎として使われ、米軍による機銃掃射を浴び、今も弾痕のあとが残る。

## (4) 世界遺産候補として

2007年、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の一つとしてユネスコ世界遺産センターに推薦書が提出されたが、イコモスの現地調査で、「禁教期を主体にすべき」との指摘があり、推薦を一旦取り下げ検討した結果、田平には隠れキリシタンの歴史がある訳ではなく禁教期との関係性がないことから、世界遺産の候補から除外されることになった。



## 3. 昼食は田平公園で

最後の食事は平戸大橋や平戸市街地の景観が広がる田平公園で。

(右写真は田平公園からみた平戸大橋)

## 4. おわりに (小関 哲 先生)

はるばる大阪からここへ来る価値を信じて足を運び、4日間おつきあいあいいただき、ありがとうございました。通常は6泊7日とし、導入部は平戸の歴史を勉強しているという名目で2日間、民泊は3日間、最後に長崎原爆資料館を見てもらい長崎の高校生、大学生たちと語り合ってもらい、自然と歴史と平和構築のためのプログラムを12年続けてきました。

今回とてもうれしかったのは、皆さんニコニコしてくださって少女のような顔で楽しんでくださったことです。皆さんが笑顔で帰っていただくと、僕たちはこの仕事を続けて行っているのだと勇気をいただいたこととなります。ありがとうございました。このあと、堀さんの謝辞があり、さらに古民家レストランのクリスティーナさんが見送りに見え、平戸島に別れを告げました。

以上